幼児の教育　第96巻　第1号　平成9年1月1日（毎月1回1日発行）昭和23年4月15日第三種郵便物認可　ISSN0289-0836

N24
1
96[1]

幼児の教育

家庭-保育所-幼稚園

'97年 1月号

10.10.14

第96巻 第1号 日本幼稚園協

手づくり保育シリーズ

なんでも「手づくり」してしまう先生たちに贈る新シリーズ。不得手先生でも子どもたちといっしょに楽しみながらつくれるのがチャームポイント。

⑧つくってあそぼう！　ダンボール

どこにでもあるさまざまなダンボールを使って遊んでみよう。一人で遊べる小さなおもちゃ作りから、仲間でいっしょに遊べる乗り物や家など大型の製作まで紹介。切り方や貼り方などダンボール製作の基本書。

ねもと　いさむ・著

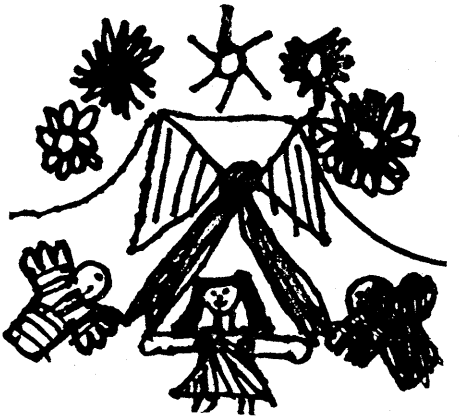
B５判・96頁・定価2,200円（本体2,136円）

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第96巻　第1号



幼児の教育　目次

――第九十六巻　第一号――

二十一世紀にむけて幼児教育を考える(10)　人間らしさの回復…秋山　和夫…（4）

初めてのオーケストラ……相葉　武久…（8）

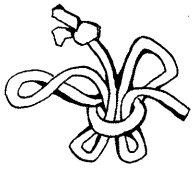
震災後の子どもたち(13)　中学生とボランティア……増田　喜昭…（13）

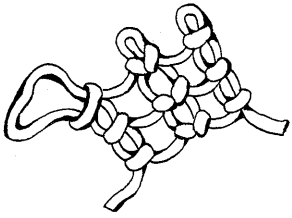
子ども時代と私(5)　私の小学生時代……湯沢　雍彦…（18）

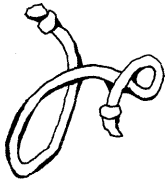
わたしの　とった……谷脇のぞみ…（23）

ある日の育児日記から(73)……佐藤　和代…（29）

© 1997
日本幼稚園協会

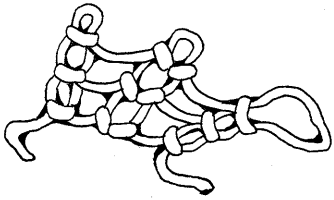






障害の考え方、半世紀の変化―米国を訪問して考える(2)―……津守　真…（30）
子どもたちへのまなざし(22)　K男の変身……松井　とし…（40）
四季の庭・四季の道　正月の花……浅山　英一…（42）
東欧の子どもたちと幼児教育(4)
家族を描く―ブルガリアの子どもたちの絵―……杉本　裕子…（49）
外国の文献から『心情と知性の教育―日本の就学前と小学校教育に関する考察』
第六章　生徒が誤った行動をしたとき仲間や教師はそれをどのように扱うか
桝田　智子…（55）

表紙絵／小田原千佳子
扉題字／津守　真
扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット／彌永たたえ「毛糸と糸と」
編集委員／田代　和美・伊集院理子・上坂元絵里
編集部／仲　明子



二十一世紀にむけて幼児教育を考える(10)

人間らしさの回復

秋山　和夫

「道徳なき社会」というと少し表現がきついかもしれない。非行、暴力、いじめといった子どもの問題行動なども、自己中心の欲求充足のためには手段を選ばないで行動するという考え方が、その背景にある。

車内で、お年寄りや身体の不自由な人へ座席を譲らない若者は多い。そこには、自分は早くから来て座席を取っているのだ、おそく乗った者は立つのが当然だといった、自己中心的合理主義が、若者の人生観を支えているのであろう。他人に対する思いやりの心は極めて乏しいのである。

現代の青少年の行動や意識を憂えるおとなは多い。こうした青少年が育った理由は

決して単一ではない。しかし、その中のひとつとして、幼児教育のあり方を考えてみることはできないだろうか。

「三つ子の魂百まで」ということわざがある。三歳を中心にした幼児期に身につけたものは、その人の生涯にわたって強い影響力を持ち続けるということを、人々は生活の知恵として経験的に気づいていたのであろう。

三歳頃は、基本的な生活習慣や、物の考え方を形成していく上で大切な時期である。おとなの指示に素直に従い、習慣化されやすい時期である。「狼に育てられた少女」の話に象徴されるように、人間は環境に影響されるところが大きく、幼い時ほどそれは大きい。

生活習慣を始めとする生活態度、他人に対する思いやりの心、人とうまくかかわる力、人間として基本的に備えておくべき心情や態度などは、子どもに生得的に身についているわけではない。学習することによって、はじめて身につけることができるのである。この点は、知識や技能の学習と全く同じである。

現代の青少年には、人間として基本的に備えておくべき心情や態度が身についていない、と言える。

こうした側面の教育を訓育という。訓育はわが国では、学校教育の主要課題ではなく、それはむしろ家庭教育の役割であった。

第二次大戦前の社会においては、家庭や地域に教育力が備わっていた。柳田国男が

言うような「笑いの教育的効用」を可能にするような地域の共同体規制、年中行事、通過行事、遊び仲間、三世代家族――こういう伝承的な習俗や行事、生活実態などが、子どもの教育に重要な役割を果していた。いわゆる「隠されたカリキュラム」が子どもの訓育的側面の教育を担っていた。

このようなことを前提にして、学校は知識や技能などの陶冶的側面の教育に力を注いでおればよかった。

幼稚園も例外ではなかった。遊び方や仲間とのつき合い方も地域の遊び仲間の中で教えられ、身につけてきていた。基本的な生活習慣も遊び仲間や家庭の中でしつけられていた。幼稚園はそうした子どもの生活実態を前提にして、幼稚園の指導を展開することができた。

ところが、現在では核家族で兄弟姉妹の数は一・五人以下ということで、一人っ子の割合も高い。遊び場も遊び仲間もなく、兄弟姉妹のいない子どもたちは、テレビやファミコン、雑誌などを相手に、狭い家の中で一人遊びをして時間を過ごす。または、早期才能開発教育のための塾やおけいこごとにはげむといった状態がかなり一般化してきている。

そのために、相当量の文字や知識などを身につけた幼児が入園してくることになる。反面、社会性や基本的生活習慣や、人間として身につけておくべき心情や生活態度などは白紙に近い子どもたちも目立つようになってきている。

古来、子どもは友だちとの遊びの中で、友だちとのかかわり方を学び、友情の大切さや協力することの必要性に気づき、思いやりの心をはぐくんでいった。また、動植物や自然現象に接する中で、自然の偉大さ、不思議さを感じ、自分の思うようにならない世界のあることに気づき、自然に対する畏敬の心を育てていったのである。遊ぶことを通して、生きるために必要なさまざまな能力や知恵を獲得していった。その意味で遊びの人間形成に果す役割は大きいと言わなければならない。

子どもの中に人間らしさを回復する道は、遊びの回復以外にないと私は思っている。

二十一世紀は、現在以上に子どもの生活環境は悪化していくのではないか。

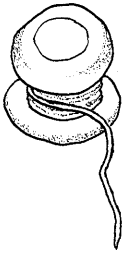
広い遊び場、豊かな遊具、多くの友だち、すぐれた教師という条件の備わった幼稚園の役割は、子どもの人間形成のために見直され、その役割が増し重要になっていくものと思われる。

人に対するやさしさと思いやりの心を持ち、バランス感覚に支えられて生活する力を持った子どもの育成によってのみ、二十一世紀の展望が開けるであろう。

（山陽学園大学）

初めてのオーケストラ

相葉　武久



街には様々なジャンルの音楽が溢れています。人によって心地良く感じる音楽や単に騒音と感じる物もあります。人間の歴史の移り変わりと共に、音楽も変化を遂げ、これからもニューミュージックがたくさん生れてくると思います。

我々（財）東京都交響楽団の有志が、東京都交響楽団トップメンバーズアンサンブルという団体を作り、生まれて初めてオーケストラを体験する子ども達に、音楽の素晴らしさを感じてもらう目的で、約十年以上前に結成し活動してきました。結成のきっかけは、駒込にあります大和郷（やまとむら）幼稚園の卒園記念行事として、「お別れコンサート」を卒園児にプレゼントしようという、園の先生方のアイディアと情熱でスタートいたしました。

楽器編成は、ヴァイオリン二名、ヴィオラ、チェロ、コントラバス、フルート（ピッコロ持ち替え）、

クラリネット、ピアノ各一名、パーカッション（ティンパニー・ハーモニカ含む）二名というメンバーです。

今までに東京、神奈川、埼玉の幼稚園、保育所、養護学校、小学校でコンサートを行っていますが、多少の変化はあるものの、音楽会の企画構成は大和郷幼稚園がモデルになっています。

大和郷幼稚園では毎年のことなので、園長先生はじめ、先生方の情熱、ご父兄の皆様や園の資金面でのご理解、ご協力、楽員の前向きの姿勢が無ければ、続いてこれなかったことと思います。

さて、どの様に音楽会を作っていくか、大和郷幼稚園を例にとってご説明します。

園での音楽会開催決定を受けて、秋頃、年長の先生方と当方のスタッフが顔合せをします。そして、全体の企画構成を話し合います。十年以上も続いているコンサートなので、大きな流れは決まっていきます。二回目の話し合いではアレンジの方に来ていただき具体

的な話し合いになります。

演奏会は約一時間です。内容は次の様なプログラムです。まず楽器のお話。子ども達の好きな曲、楽器に合った曲を演奏します。メインはプロコフィエフ作曲、川崎絵津夫氏編曲の「ピーターと狼」。サン・サーンス作曲の「動物の謝肉祭」の時代もありました。次はアレンジによる「大和郷の四季」といった園児の一年間の成長を追った曲や、ディズニーメロディーや、一年間の成長をスライドに撮り、スライドを観ながらバックに音楽をつけるといった物等、内容は豊富です。この部分は年長の先生方のアイディアが出る所です。プログラムの最後は、年長さんの大好きな曲をオーケストラの伴奏で歌います。

さて練習です。演奏会の少なくとも一週間以上前に練習日を設定します。ナレーターは、毎年、年長の先生の中から一人選ばれます。音楽会の進行や「ピーターと狼」のナレーションの大役を努める音楽会のスターです。

メインの「ピーターと狼」では、毎年ナレーターが変わるのですが、オリジナルのナレーションを作っています。毎年毎年自分に合った言葉と表現が素晴らしく、オーケストラ全員楽しみにしています。

アレンジ物は指揮者がいないので、丁寧に何度も練習します。素晴らしい編曲の出来映えに先生方も大感激、演奏会の成功への期待がふくらみます。

色々な方々に大和郷ヴァージョンの編曲をお願いしました。それぞれ持ち味をいかした編曲でしたが、近年お願いしている赤堀文雄氏のアレンジは、園児にとって楽しくて歌い易く、ご父兄はじめ大人にとっては可愛くて切なく美しいものです。

本番当日、ステージ練習での最終チェックを行い本番を迎えます、園長先生のご挨拶の後、全員が拍手で楽員を迎えてくれます。子ども達は、これから始まる音楽会への期待でキラキラしています。

まず楽器解説（楽器のお話）です。初めて見る楽器や演奏に体一杯で興味と喜びを表現してくれます。

メインの「ピーターと狼」は、ものすごく勉強したナレーターの先生のお話に一喜一憂しながら物語を追います。短いハッピーエンドのエピローグがあり曲が終わると、園児達は大喜び、ご父兄、先生方は子ども達の成長した姿と音楽の持つ大きな力に感動して下さいます。

昨年、今年の音楽会では、「大和郷の四季」という、年長さんの成長を移りゆく四季と園の行事とを音楽にまとめたアレンジの曲は、構成・編曲が素晴らしく、こみ上げるものを止められません。

この曲の中で、運動会で園児達が踊るねぶた祭風の「荒馬おどり」が最高潮となります。体全体を使って踊って喜ぶ園児達、笑顔でいながらもう止まらなくなった涙を拭うご父兄、先生、そして楽員。涙、涙。

プログラムの最後は、年長さんの好きな歌をオーケストラの伴奏で力一杯歌います。この一年間、先生のピアノ伴奏で何回も何回も歌った大好きな歌です。ご

▲「ピーターと狼」の演奏風景（帽子をかぶった人がナレーターの先生）

父兄はじめ大人達は深い感動に浸ります。子ども達は歌えた喜びで大はしゃぎ、喜んでくれたかな。

反省会の席では、一年間の苦労と全員の情熱に乾杯をし、来年度のコンサートに向けて年中の先生方と軽く意見を交換をし、「お別れ音楽会」のしばしのお別れをいたします。

秋には、お茶の水女子大学附属幼稚園の百二十周年記念行事の一つとしまして「ピーターと狼」をメインにした音楽会を園の先生方と作ります。お茶の水オリジナルのナレーションを大いに期待しています。

近い将来、我々の音楽会を聴いた子ども達が、東京都交響楽団はじめ日本のオーケストラや音楽会に帰ってくる日を楽しみに待っています。

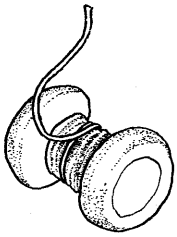
（東京都交響楽団トップメンバーズアンサンブル）

▲コントラバスを演奏する筆者

震災後の子どもたち(13)

中学生とボランティア

増田　喜昭



その日は土曜日だったので、僕はてっきり学校は休みだと思っていた。神戸にボランティアに行く人を探していたとき、中学生四人が行きたいと申し出たので僕は「そいつはすばらしい、いい経験になるぞ」と喜んで、彼等を仲間に加えたのだ。

僕は四日市で子どもの本屋をやっているのだが、同時にその店の三階で子どもたちに少林寺拳法を教えている。単に自分が強くなるだけでなく、世の中の役に立つ青少年を育てたいという考えもあり、少林寺拳法はその教えのなかに、〈半ばは自己の幸せを、半ばは他人の幸せを〉という

のがあって、半分は他人の幸せも考えられる人になろうというものである。

兵庫県南部の大地震後には、そんな子どもたちの気持ちがひとつになって、さまざまな活動や思いが広がっていった。

地震直後に、僕は道場で義援金の話をしながら、「お年玉半分持ってこい！」などと興奮して叫んでいたらしく、翌日、一万円以上の大金を持ってくる子どもたちがいて驚いてしまった。

そんななかでの神戸行きだったので希望者も多く、とりあえず中学生以上はＯＫ、ということにしたのだが、その土曜日は学校のある日で、さっそく校長先生から電話でおしかりを受けることになった。それは、二次災害があったらどうするのか、またその責任は誰がとるのか、といった内容で、立場上、校長先生は許可することはできないことはよく理解できたのだが、子どもたちのその気を変えることはできないので、結局ずる休みということにして出発したのだ。

その日は、車四台で焼そば三百人分（材料は細かくきざんでビニール袋などに入れてある）、それと、市の女性課が集めてくれた、生理用品と下着千人分をつみ込んだ。

金曜日の夜、集まった中学生たちのいでたちを見て、僕たちは笑ってしまった。寝袋に着換えなど、まるでキャンプにでも行くような重装備だったのである。そのときもうすでに車の中は救援物資でいっぱいで個人の荷物はじゃまになるほどだったのだ。

何が必要か不必要かは、行ってみて体験しないとわからない。まあいいか、ということで、荷物にうずまった中学生たちを乗せて出発した。

途中、カーブの多い天理の山道で、大量の生理

用品が彼等の頭の上にドカドカッと落ちてくるというハプニングもあったが、どうにか目的地に着いた。

そこはもう、あわただしい所で、大学生のボランティアや全国から集まった人たちが、てきぱきと昼、夜なく動き廻っていたので、誰も中学生にかまっている余裕はない。

ただウロウロしている中学生に誰かの声がとぶ、「明日は早いから早くどこかで寝ろ」。ボランティアは、とりあえず、自分のことは自分で出来ないとどうにもならない、誰も食事や眠ることを気にかけてはくれないのである。

翌日の朝から、中学生たちは、それぞれ一台ずつの自転車を与えられて、御用聞きに廻る。注文のあった品をメモして帰り、自分でその品をそろえ、また自転車で運ぶという仕事をした。

避難所やテントの中のおじいさんやおばあさんは、まるで自分の孫のような子どもたちの運ぶ物資をたいへん喜んでくれたようで、中学生たちの顔は、どれも満足そうであった。それでも、「わしゃ綿のパンツしかはかん」とか、「もっと早く持ってこい」とか、いろんな苦情も聞きながら、一件一件細かく廻ることのできる自転車は、けっこう活躍した。

翌日は、近くの小学校で焼そばを作った。長い行列の一人一人に焼そばを手渡しながら、中学生たちは、自分の昼食のことを忘れるほどよく動いた。というよりは、ボランティア隊の食べる分はないのである。その場で食べることが許される状況ではないのだ。

夜、本部に帰ってから、彼等は「あのー、腹へったんですが」とおそるおそる聞く。「あ、そこらへんにインスタントのもんがあるやろ、バナ

ナもあったかな、適当に食べてくれ」という返事。彼等はそれぞれ好みのカップラーメンを探し出し、嬉しそうに輪になって食べていた。

状況はきびしい。人手も物資もまったく足りない。夜中まで活動は続く。物資の調達、携帯電話の確保、自転車やバイクの手配、めまぐるしく動く。やってくるボランティアのめんどうを見ている人は少ない。皆、自分で自分のやるべき事を探して動くしかないのである。

日曜日の夜、寝不足のまま、中学生を乗せた一台だけ、四日市へ帰ることにした。「残りたい」と言った中学生もいたのだが、これ以上学校を休ませると、次に来ることが出来ないからと、説得したのだった。

帰りの車の中で、彼等は興奮して、自分の見た事や体験したことを語ってくれた。ほんとうは疲れていて眠いはずなのに、その体験はよほど強烈だったのだろう。実に眼は輝き、生き生きとしていたのだ。

結局、彼等の大きなカバンにつめられた、着替やいろんな道具たちは、一度も使われることなく、車の中に置かれたまま二日間放置されていたのであるが、そんなことは誰も口に出さなかったのは、いまとなっては笑い話である。

僕はこの二日間の中学生たちを見ていて、正直、一日目は、連れてくるんじゃなかった、と思うことも何度かあった。やっぱり、自立していないやつはダメだ、と思ったりした。しかし、ひとたび、誰かに喜んでもらえるという実感を持った彼らは驚くほどキビキビと動き出したのだ。

これは、学校や日常生活では味わうことのできない、生きたナマの体験なのである。人が人とし

て人と関わりながら生きるという単純な実感を、ひょっとすると彼等は今まで一度も味わったことがなかったのかも知れないのだ。

予定通りの、時間割通りの、学校と塾とクラブ活動の日々の中では感じることのできなかった何かを感じたのではないか。

神戸の仲間たちは、中学生四人にむかって、「お前たち完全にはまったな」と言った。それは、他人に喜んでもらえたという実感のことを言うのだ。「残りたい」「また来たい」と口々に言う彼等を見ていると、まさにはまったと思えるのである。

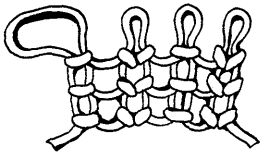
ボランティア、と言えるほど大したことをしたわけではないし、ほんとにささやかな行動であったのだろうけれど、確実に、彼等の中に残ったものはある。

行動しながら考え、考えながら行動すること、それは教室で机の前でコツコツ勉強すること以上に大切なことなのかも知れない。

幼い頃から、文字や数字を憶えさせることに熱心になっているうちに、行動しながら考える、遊びながら学ぶ、地域のことを考える、助け合って生きる……そんなこんなを、体感することを忘れていくのではないだろうか。

子どもたちに、もっともっと街に出て遊んでほしい……。そんなことを、中学生と神戸へ行ったこと思い出しながら考えている。

（子どもの本の専門店・メリーゴーランド）



子ども時代と私(5)

私の小学生時代

湯沢　雍彦

支那事変が始まった昭和十二（一九三七）年に小学校へ入学し、太平洋戦争突入一年余の十八年に卒業したのだから、私の小学校時代は完全に戦争の中にある。しかし、私が目にした限り、戦いの悲惨さや暗さの影は少しもなく、のんびりとした楽しい日々が続いていた。戦いは外地で行われるものであり、神国日本はいつも勝つものと信じていればよい小学生はずっと幸せなのであった。

私は東京の「渋谷区立千駄ヶ谷第三小学校」（現在は「鳩森小学校」と改称）というごくごく平均的な学校で、小学六年間を過ごした。父親が下級公務員で転勤がなかったからだが、途中で転出・転入した児童は一割前後しかなかったから、学校は変わらないのが普通の姿だったのだ。

「まるでランドセルが歩いているみたいだ」とからかわれながら、牛皮の大きなランドセルを背に入学式に

のぞんだ。一年に入った仲間は一二〇名弱、それが三年までは男女組三つに分れた。私の最初の隣席は荻原という活発な女の子で、入学早々、この子に下敷きやノートを隠されてしまい、半ベソをかいた。荻原さんは三人姉妹の末っ子で、このような行為には十分慣れていたらしいが、やっと一歳の妹が一人いるだけの私には対応がわからなかったのである。担任の中年の女の先生は、この程度のイジメには何の措置もとってくれなかった。

「サイタ　サイタ　サクラガサイタ」

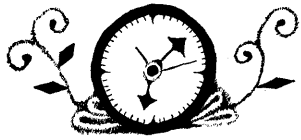
「コイ　コイ　シロコイ」

で始まる国定国語教科書巻一は、軽快なリズムを教室一杯にひびかせた。三年前までの第Ⅱ期国定教科書は挿絵も白黒で味気がなかったが、第Ⅲ期からは水彩画ながら色がついて明るい感じを出していた。全国ただ一種類の国定教科書だから定価は八銭と安く、全教科揃えても五十銭程度であった。しかし、授業料と合わせてこの教科書代を出せない家庭もあった（当時の平均月収は二十ないし八十円位だが、貧富の差が激しかった）。時々あらわれる「くず屋の加藤君」もその一人で、出てきた加藤君にまわりの者は競って本を見せてあげた。加藤君も悪びれることなく、くったくない笑顔でつきあってくれた。「不登校児」などという嫌な言葉はまだなかったのである。

学校は明治神宮北参道入口から五分の所にあったので、毎月一日は一・二時間目をつぶして上級生の神宮参拝が行われた。朝礼で校長先生が明治天皇御製の和歌を読み上げ、それを全生徒が唱和してから出発するのだったが、六年になった時、帰校時に誰も復唱できる六年生がいないというので、校門前に一時間も立たされたことがある。およそ反抗的な批判精神なぞはなかったから（社会全体もそうだったが）、皆おとなしくこのおしおきに従っていた。

しかし、ふだんの明治神宮は絶好の遊び場になった。広い境内のあちこちに適当な広さの空地があり、相撲をとったり、三角ベースをしたり、追っかけっこするのにうってつけだった。ほかに中央線に沿って千駄ヶ谷駅周辺には軍の馬場があり、時々駈け抜ける軍人の馬術練習をやり過ごしては、テニスの軟球でゴロ野球をやるか、冬には軍艦ゲームか馬飛びをよくやっていた。新宿御苑も近かったので、その塀の外側をつたい歩きする土手も遊び場になった。だが帰りには、中央線の低くて陰気なガードをくぐらなくてはならないのが難点だった。「この間は、赤マントと青マントが出て子どもをさらっていったそうだ」と、お互いに言い合っては恐怖感をあおっていたからである。

時計などは誰も持っていなかったから、日暮れになるのを合図に帰っていったが、遅くなっても母親が迎えに来てくれたのは一年の時だけだった。塾も稽古事もなかったし、ラジオを聞いた覚えもほとんどない。夕食後はちょっと予習・復習して、あとは『少年倶楽部』か本を読んで過ごした。『のらくろ』や『冒険ダン吉』などのマンガ本か、山中峯太郎の『敵中横断三百里』などの冒険小説、あるいは『愚弟賢兄』などの佐々木邦のユーモア小説を愛読した。



入学した小学校の隣には牧場があって、牛がのどかに鳴き、時々は異臭がただよってきた。三年になる頃、学校がそこを買収して運動場が広くなった。秋の運動会では、出番待ちの列から見上げると、ヤンマや秋アカネが青空を埋めつくすほど飛び交っているのが印象的だった。そして土曜日の午後、運動場に出ていると、神宮球場の大歓声がどよめいてくることがよくあった。プロ野球よりも高校野球よりも、六大学野球

の方が人気が高かった時代である。「今度の土曜日には見に行こうよ」という話がたちまちまとまった。仲間の一人の父親が慶応病院に勤めていて、いつもネット裏の券を二枚持っていた。集まる仲間は六～七人もいたが、それでも構わなかった。球場へ行くと、ネット裏券二枚を外野席の子ども料金七人分と換えてくれるオジさんがたいていいたからである。

十月には毎年、京王閣まで「イモ掘り遠足」に出かけ、十一月には「学芸会」が開かれた。しかし、大正末に立てられた木造の校舎には大教室も体育館もなかったので、神宮球場前にあった日本青年館大ホールを毎年借りて行われていた。これは、今としてもまことにぜいたくな行事だった。各学年は、合唱、器楽演奏、理科実験などのほか、劇を上演した。今のように、全生徒に出番を割り振るような民主的配慮はなかったから、私は何とか出番にありつこうと頑張ったものだが、二～三回しか成功しなかった。

四年の秋は、当時の日本暦で「紀元二六〇〇年」にあたり、皇居前で開かれた式典跡を見学するため、半日がかりで徒歩で往復した。また、学校が明治通りに近かったので、原宿宮廷駅で乗下車する皇族の送迎のためしばしば沿道に並ばされるなど、軍事色というより天皇色が強くなってきた、昭和十六年十二月八日朝のラジオは小学生の胸にも興奮をもたらした。戦勝ばかりを告げるラジオ放送に気分はますます高揚させられたが、食べ物、着る物、学用品の順で、いろんな物が姿を消し始めた。チョコレート、アイスクリーム、ケーキ、クッキーなど、私の好きな洋風の菓子類は真っ先に見えなくなったのはまことに残念だった。イトコが、これはチョコの味がすると言って教えてくれた物は栄養剤か薬品だと思われたが、それを食べ尽くしたのがチョコの味とのお別れになった。「欲しがりません、勝つまでは」という垂れ幕が方々に下がり始

め、それを横目にした我々はつばを呑み込むほかなかった。

しかし、模型材料店だけは終戦間近まで続いていたように思う。子どもが航空機にあこがれるのが奨励された時代で、工作の時間にも模型飛行機作りが多くなった。『飛行少年』という雑誌を見ては少しでもレベルが高い飛行機を作り上げ、それを校舎の二階から飛ばすのを先生が手伝って下さった。しかし女の子は、工作などには手を出さず、ひたすらナギナタの訓練に励んでいるようだった。小学生は、子どもながらも「小国民」だと新聞やラジオではおだてられていた。

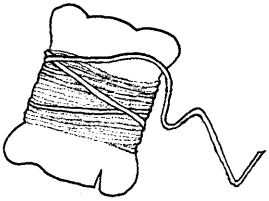
とうとう六年になり、受験の年がやってきた。全国的にみれば、当時旧制中等学校への進学率は一割もなかったろうが、東京はさすがに高く、我々の学年も半分以上が受験した（残りの者は入試がない小学校高等科へ行った）。数年前までは、受験する六年生を早朝に集めて小学校で特訓をやっていたらしいが、我々の年には、戦争のためか禁止されていた。数回の模擬試験があって、その結果で先生が相応の中学を割り振ってくださった。私は、ただ歩いて通えるという理由から「府立六中」（現在の都立新宿高校）を志願した。世間では難関校の一つと言われていたが、私はあつかましくも落ちることを考えていなかった。二倍の倍率だったとあとから聞いた。そこでの入学試験では、筆記試験が全くなく、六室をめぐって歩く面接試験と体育実技が重視された。礼儀正しく即答しなければならない面接の方が筆記よりよほどきついなと思ったが、無事合格できた。

こうして、のんびりした小学校生活を終り、きびしくて悩み多い、戦時色濃厚な旧制中学校生活へ入っていったのである。

（郡山女子大学）

わたしの　とった

谷脇　のぞみ



年少組、五月初旬のある雨の日。アキコが泣きそうな顔をして「先生、わたしの　あの人がとった」と、言いに来た。指さす方を見ると、サキが、ままごと用の木のまな板をかかえている。アキコに「あのまな板、アキコちゃんが使ってたの？」と聞くと、アキコは「うん」と答えた。それを聞いたサキは、不満そうに、「だって、サキちゃんが前に見つけちょったがで」と言う。私が「前っていつ？」と聞くと、「昨日よえ。サキちゃんも使おうと思うちょったがで」と言う。アキコもサキも自分のだと言って譲らず、まな板の引っ張り合いになった。どちらも自分の物にしたくてギュッとつかんでいる。そのうち、二人とも泣き出してしまったが、それでもまな板をしっかり持って離さない。私は近くにプラスチック製のまな板があるのを見つけ、「これにしない？」と、どちらにともなく勧めるが、二人と

も「いや」と言って、なおもまな板を握り締める。そして、引っ張りきったサキが、まな板を使い始めた。

アキコは「わたしもまな板がほしい」と言い続けた。私は「そう。アキコちゃんもほしいよね」と言いながら、そばにある大きな皿を差し出し、「これでも、まな板に使えるよ」などと他の物で代用することを提案してみるが納得しない。

そうしているうちに、すぐそばで、リョウスケとカオルコがままごとの包丁の取り合いを始めた。「僕の」「カオルコの」と包丁をしっかり握り締め、顔は真っ赤になり、涙もあふれそうである。別のコーナーにひと回り小さい包丁があったので、「これを使ったら?」と言いながら私が二人を振り返ると、包丁は放り出されて、今度は、赤い電話を取り合っている。もう一つ同じ電話があるはずなので、探して持って行き、「もう一つ電話があったよ」と言うが、リョウスケもカオルコも「これがいいが」と最初の電話を引っ張り続ける。

その取り合いの声を聞いて、さっき、まな板を取り合っていたサキが、「わたしも電話がいる」と言い出した。そこで、私は二つ目の電話には関心を示さなかったリョウスケとカオルコの二人に、「この電話、サキちゃんに貸してあげていい?」ときくと、必死で引っ張っていた二人の手が止まり、もう一つの電話に目がいった。

電話の方に気がそれたからか、サキはまな板を使わず、粘土を手で丸めてごちそうを作り始めた。アキコは、まだ、まな板がほしいと言っている。私は、二人の様子から、今、本当にまな板を使いたいのは、使っている最中にとられたアキコではないか、サキは自分が前に使っていた物を他の人が使っているのを見てほしくなっただけであり、それほどまな板を必要としているわけではないのではないかと感じた。そこで、サキの気持ちがまな板からそれたとき、私は、アキコに、まな板がサキの後ろに置

きっ放しになっていることを指でさして知らせ、今がチャンスと目で合図した。そのとき、私は、アキコに「サキちゃんは今、まな板を使っていないから、貸してって言ってみようか」と、言うべきであろうかとも考えた。けれども、「かして」と言われたサキが、またほしくなって「いや」と言い、まな板をかかえる姿が目に浮かんだ。そこで、人の気がそれている間に使うというのも、この時期、有効な手段であることを経験してきた私は、サキには気づかれないように黙って取ることをアキコに勧めたのである。

アキコはまな板をそっととり、少し離れたところに持って行き、まな板の上で粘土を切り、ままごとの続きを始めた。

リョウスケとカオルコの方を見ると、それぞれひとりずつ電話をひざに乗せ、受話器を持って、だれかと話をしている。

サキもまな板のことは忘れ、粘土のごちそうを作っていた。

ほんの数分の騒ぎはおさまり、しばらくはそれぞれが、思い思いの遊びを楽しんだ。

私は、入園してまだひと月も経たないこの時期、一人一人の子どもが、安定して自分らしい生活をゆったり送ることができるようにという願いをもっていた。そのため、いろいろな遊びが始めやすいように、また、やりたいと思ったら、だれでもできるようにと、遊具も多めに用意していた。けれども、子ども達はいくつ同じものがあっても、〝これ〟が

ほしいことが多い。あるときは、〝これ〟だけではだめで、〝これ〟も、〝それ〟も、〝あれ〟も、全部ほしいこともある。そして、取り合いになってしまう。

四人は入園してからこの日まで、どんなふうに過ごしてきたのだろう。

カオルコとサキは、いろいろなことがやってみたくて、人がやっているとそれがほしくなり、よく取り合いになっていた。自分の物にならないと、「サキちゃん（自分）に、貸してくれん」とか、「わたしのやに」と言いながら泣くこともよくあった。そして、「わたしのやき！」と強い口調で言われた相手は、なんだかよくわからないけれど、譲ってしまったり、教師に「他にも同じのがあるよ」と言われると、それを使ったりしていた。けれども、だんだん他の子ども達も幼稚園での生活に慣れてきて、「返してや！」と言われても、「わたしだってほしいがやき」と言い返すようになってきた。そして、取り合いが、たびたび起きるようになった。

アキコはままごとが好きで、入園当初から毎日のように粘土でごちそうを作っては、お気に入りの猫のぬいぐるみに食べさせていた。粘土で遊び始めても、少し遊ぶと他の遊びに言ってしまう子が多いが、アキコは一人になっても粘土でごちそうを作っていることが多かった。

リョウスケは、登園してしばらくは母親と離れがたく、毎日三十分～一時間ほどは、母親と一緒に遊び、どちらかというとおとなしい印象の子どもであった。この日、母親が九時には帰る約束をして来

たからと、九時になっても母親と離れたくなくて泣き出したリョウスケを置いて帰った。リョウスケは、そのうち、いつも母親と一緒にままごとをしているところへ行き、ままごとを始めた。いつもは、ままごとコーナーのまわりにあまり人がおらず、自分の使いたい物は大体使えていたのであるが、この日は雨も降っており、遊びたい人が次々やって来て取り合いになった。

取り合っているときの、四人それぞれの気持ちは、どうであっただろう。

まな板を使って粘土でごちそうを作っていたアキコは、今している遊びにはまな板が必要なのに、その道具を取られたので、返してほしいと思っていただろう。

以前にまな板を使って遊んだことのあるサキは、まな板は自分が使えるものだと思っていたのではないだろうか。前に自分が見つけた物や、使ったことのある物は何でも、自分の物だと思い、また、初めて見つけたものであっても、自分がほしいと思った瞬間から、自分が使えるものと思って、他の子には使わせたくなかったのではないかと思われた。

包丁や電話などが次々とほしくなるカオルコは、使いたくて取り合っているというより、人が持っているからほしくなっているように思われた。

母親と一緒にいたかったリョウスケは、母親が帰ってしまった後、母親と、一緒に使っていたままごととと道具がそばにあることで安定していたのではないだろうか。それを他の人が使うことは、安定のもとを取られるようで、不安でたまらなかったのではないかと思われた。

私は、まず、それぞれの子ども達の思いに共感したいと思った。母親と離れ、だれも知っている人のいない幼稚園で、友だちは今のところ一緒にいて楽しいというより、自分の邪魔をする存在であるかもしれない。そうした中で、先生は自分の思いをわ

かってくれると感じるということは、心の安定につながり、気を取り直して、また遊ぼうという気持ちにつながっていくと思う。そこで、大人から見れば自分勝手な考え方であっても、それぞれの、〝ほしい〟〝使いたい〟〝とらないで〟という気持ちを大事にし、言葉や態度でそれを主張できるように見守った。

自分の主張と他人の主張がぶつかり合うことによって、自分のまわりにいる他の人を意識したり、自分の中に葛藤を感じたりする。葛藤を多く経験するうちに、あの人が持っている物がほしいな、取ったら怒るかな、どうすれば貸してくれるだろうなどと、相手の気持ちを考えるようになるのではないかと考えた。

そして、できれば双方が楽しく遊べるように、他の物でも間に合うならと、取り合いになっている物と同じような物をもう一つ探しては、それも使えることを知らせた。それでも他の物では気に入らず、引っ張り合いが続いたので、サキの勢いに押されているアキコには、「アキコちゃんもほしいよね」と言い、サキに「アキコちゃんも、まな板ほしいんだって」とアキコの気持ちを代弁した。さらに、サキがまな板を使わなくなったとき、そのことをアキコに知らせ、今のうちに使うことを示してみたのである。

そのような取り合いや自己主張を繰り返し、子ども達も、ひと月あまりたつと、「貸して」「ちょっとだけよ。後で返してよ」などのやり取りが、少しずつできるようになってきた。

（高知大学教育学部附属幼稚園）

ある日の育児日記から

(73)

佐藤　和代

今年、圭は七歳、有は数えで五歳。七五三はどうしようかと迷ったのですが、不信心者がいまさらお宮参りもね。で、当日は遊園地へ、写真だけ貸衣装付きの写真館で、ということにしました。

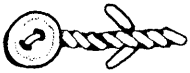
さて、写真館でまず衣裳選びです。圭は薄紫のロングドレス、有は黒いタキシード。わー、お姫さまと王子様みたい、とはしゃいでいるのは私と圭だけ。有は慣れない場所と慣れない衣裳でコチコチに固まって「お名前は？」と聞かれて声も出ず。まずいな、こんな顔で写真とられるのか。

ところがカメラマンのお兄さんは慣れたようすで、ミッキーとミニーの人形を出してきました。

「さあ、ゲームしよう。どっちが出るか、よく見てね」カメラの上に一瞬人形を出してすぐ引っ込めます。「どっちだった？」二人が「ミッキー！」叫んだところでパッチリ。なるほど。これって、お子様向けの「ハイ、チーズ」なのね。

そして、何度かゲームをしているうちに有も緊張がとけ、本当の笑顔が出てきました。そこをすかさずまたパチリ。かくて笑顔の七五三写真が出来上がり。

いやあ、うまいな。子どもを扱うプロって、いろんなところにいるものだと、感心してしまいました。



障害の考え方、半世紀の変化

―米国を訪問して考える(2)―

津守　真

私が大学を卒業して翌年に、当時愛育研究所ではじまったばかりの児童相談を受け持ったのが、障害をもつ幼児とふれた最初である。そのときには、自分の一生涯にわたってこんなに深くこの問題とかかわることになろうとは考えもしなかった。子どもの一パーセントは障害をもっているのだから、子どもの仕事の中には障害をもつ子どもが含まれるのは当然なのに。

五十年前、戦争直後には、幼稚園、保育所は午前のクラスと午後のクラスと二部制

にするほど子どもが溢れていて、障害をもつ子どもを入れてくれる園を見つけるのは困難だった。障害の人を町に放置したのでは可哀想だという考えが強く、その人たちが安心して生活できる居住型施設をつくることが福祉の重要な課題であった。この人たちは一生施設で過ごすのだから、できるだけ早い年齢で家庭からはなして、施設の生活に慣れさせておかなければ、本人が可哀想だと親は説得された。その結果は、全く逆だったことは何十年もたった現在は明らかである。

軽度の障害の人は、早くから訓練して就職させることが特殊教育の目標だった。作業所ではこの人たちもできそうな単純作業の下請けをやらせる。その程度の能力しかないというのが一般の認識であった。本当はどんな人でもそれぞれに違った才能をもっているのだが。戦後三十年もたって、養護学校義務制が言われ始めたとき、養護学校に幼稚部を設置することが義務づけられようとした。幼児期にはどの子どもも遊ぶ生活が重要なのに、それでは幼児の幸せをうばうことになる。こうして半世紀を経た。

現代の若い親たちは、子どもが大きくなったとき居住型施設に入れることはほとんど考えていない。そう思ったら親子ともに惨めな気持ちになってしまう。

現代は、普通学校との統合教育を欲している親は多いが、日本の養護学校制度はそれを許さない。また、いまの学校の条件はどの子にもあまりにも厳しい。障害をもつ

子どもでものびのび生きられる学校でなければ真の教育にならないだろう。

子どもは自分らしく生きられる学校を欲している。

どの子どもも大人になる。障害をもつ大人たちが生きる場が普通の社会生活になければならない。作業所、授産所は、最近かなり変化してきたが、企業優先の体質が抜けないのが私共の社会の現状である。

この五十年の歴史と経験を経て、私自身も障害をもつ人の理解が次第に開かれてきていることを思う。

障害をもつ人々の生活の変化——最近のアメリカ

一九九六年夏、私は若いころ学生として過ごしたミネソタ大学を訪ねた。

私が勉強していた一九五〇年代初めのミネソタ大学には、新教育全盛時代からのナースリースクールがあり、私は暇があるとそこで過ごした。障害の幼児のための幼稚園はなく、私は自分が日本で始めたばかりの家庭指導グループを誇らしく思った。現在は、米国では障害をもつ子どもの教育は、統合教育が主流であり、親の子育てを助けるのが専門家の仕事と考えられている。専門家が一番よく知っていて障害をもつ子どもの処遇を決めるのではない（かつては、このような考えが支配的だった）。現在は、親が一番よく知っているとの考えである。

障害の大人の施設は、ミネソタ州北部ファリボールトに巨大なものがあり、四十五年前に私は一週間をそこで過ごし、重い気持ちになったことを前号に記した。現在それがどうなっているかを知ることが今回の旅行の第一の目的であった。三五〇〇人いたその施設は既にほとんど閉鎖され、最後に残った九十人も一九九八年には全部コミュニティーに移される。施設から出てどうするかといえば、障害をもつ人も自分の家で自分らしい生活をする。三、四人のホームに住み、世話人も自分で選択する。昼間はジョブコーチと呼ばれる支援者が助力して会社や工場で仕事をする。それぞれが好む得意な作業をする。訓練してからではなく、その人の特色を生かすという考え方である。たとえば、紙を破るのが好きな人には、銀行で不要になった書類を破るリサイクルの仕事をする。一方には本人の好みと能力を、他方には企業に新しい職種の開発をするのかジョブコーチの役割である。

カポシア

スカルヌリス先生の紹介で、セントポール市の公共ビルの四階にある「カポシア」を訪問した。施設を出た人たちの仕事の世話をする会社である。マネージャーのJ女史は、この広い建物は、数年前までは障害をもつ人の作業所で、一〇〇人を超える人たちが仕事をしていたが、いまは、みんな工場や会社に出てゆき、二十数人の職員は

町中に散らばって仕事をしていると言われた。障害をもつ人々が、居住型施設からコミュニティに移った後、とくに重度の人たちをどうするかは大きな問題だった。私もそのことが知りたくていろいろとたずねた。

J女史「ここは非営利会社です。ひとりひとりの障害をもつ人に、仕事の斡旋とサービスをします。この会社のスタフ、ジョブコーチ、ソーシャルワーカー、グループ、ホームの世話人、親、兄弟、本人などがここに集まり、ブレインストーミングをやって、その人の好みの能力を良く知るようにします」

私　「どんなに重度の障害をもっていても仕事場にいって働くのですか」

J女史「そうです」

私　「言葉を話さなくても、行動の問題があってもですか」

J女史「そうです」

私　「この会社はいつ始まったのですか」

J女史「一九六三年からです。もちろん、その頃はいまのようではなく、ここは作業所でした。当時は公立学校に障害児をいれてもらえなかったし、メインストリームの運動もありませんでした。デイケアの活動もありませんでした。

すべてその後のことです。それから作業所の時代にはいります。一九九〇年にはデイケアの作業所は全部なくなりました。ほんものの仕事につくのを助けるジョブコーチにかわりました」

居住型施設を閉鎖して後、一方には、三、四人を単位とするアパートの住宅を斡旋し、他方には仕事の開発をする、その積極的な取り組みがあってこその施設の閉鎖である。カポシアのような会社がいくつもあって、本人や親が、その人に一番適切な会社を選んでサービスを買うのが現代のアメリカの福祉である。以前には施設や、作業所、学校などで働いていた職員の多くが、いま、障害の人をコミュニティにひきいれる仕事に意欲的にかかわっている。

変化する時代

前号に紹介した『障害をもつ人のサービスのマニュアル』の第二分冊は、「変化する時代」と題して、歴史とノーマリゼーションの理解を主テーマとする。

「私共は、過去のあやまちから学ばないならば同じ失敗を繰り返す」

「障害をもつ人々が消費者であり、私たちは彼らのために仕事をするのに、これまで彼らに発言の時を与えてこなかった。私たちはこの人々が私たちは住みたく

ない場所に住まわせながら、彼らが反逆すると驚いている」

「隔離は人をフラストレートさせ、普通には見られないおかしな行動を生み出す。一列に並び、指示を待ち、依存し、決断を他人にゆだねる。隔離は、隔離が必要なのだという信念をも作り出す。障害をもつ人は社会の脅威であり、反社会的だという考えをも作り出す。大きな施設に集めることは最初は良いと思ってなされたが、結果は悲劇であった」

「ノーマリゼーションは生態学的概念である。私たちの第一の仕事は障害をもつ人を変えることではない。朝起きてから、食事をし、夜寝るまで、できるだけ普通の生活環境をつくることである。環境とは物理的環境であるとともに、他の人間との相互性の環境（親しみ、愛、理解など）である」

「職業、教育、生活の準備のために訓練させねばならないという考えは、すでに隔離と依存を前提にしている」

「私たちは歴史を変化させる機会を作ってきた。そして成功した。しかし行く手はまだ遠い」

ジョブコーチ

J女史の紹介で、次の日、ジョブコーチの現場を訪問した。

静かな工場の一室で、四十歳くらいの男性がボール紙の型紙を左から正面の机の上に移し、機械の取っ手を一度上から下に押して、それを右側の机に移すという仕事をしていた。その人は目が見えず、耳も聞こえないとジョブコーチのBさんは話してくれた。十五分くらいするとその男性は急にBさんにとびかかった。トイレにゆきたいんですとBさんは言って、連れて行った。戻ってくると、彼はBさんの肩をつかんで激しく揺すった。寝たいんだねと言って、Bさんは床にマットを敷くと、彼はそこに横になった。一日に四～五時間ここで仕事をするとのことだった。五年前までファリボールトの施設に入っていて、一日うずくまって自傷行為をしていたとのこと。今はこの近くのアパートに住む。Bさんは数年前までは施設の職員をしていたが、いま、仕事がこのように転換して生きがいを感じていると語った。

歴史を変えるという意識で希望をもって仕事をしている人たちを見るのは気持ちの良いことである。これは、今回の私の旅行の大きな収穫であった。

ミネソタ大学

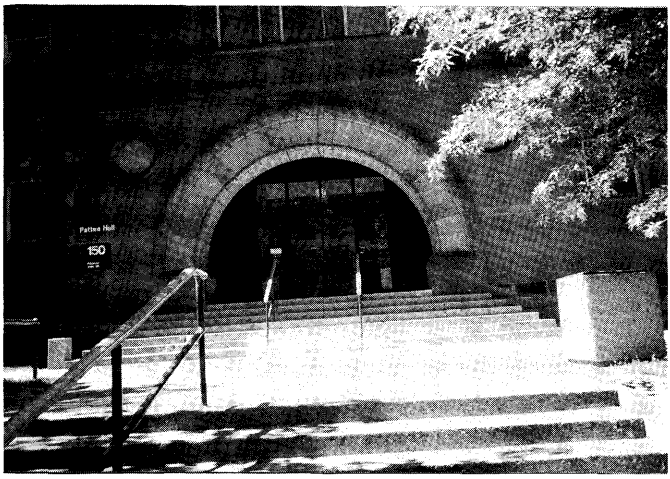
四十五年前に、私が勉強していたミネソタ大学児童研究所は、ロックフェラー財団によるアメリカ国内七つの大学研究所のひとつで、二十世紀前半の児童研究の先端をゆくものだった。「パティーホール」という古風な建物の中にあったが、私が去って

間もなく背後のビルに移転し、その同じ建物は、現在、「居住型施設とコミュニティ生活センター」（Center on Residential Institution and Community Living）という長い名前の研究所になっている（写真）。そのことを知らなかった私は、かけかえられた看板を見てびっくりした。この研究所は、大学の十三の学部が協力して、障害をもつ人のサービス及び職員訓練のプログラムの作成にあたっている。ミネソタ州にある社会福祉の講座をもつ二十六のカレッジのコミュニケーションセンターでもある。主任研究員レイキン教授は私がかつてこの建物で勉強していたことに感銘され、私のために半日さいて案内してくださった。その昔懐かしい建物には、長年所長をつとめられたジョン・E・アンダーソン教授の部屋、昔風の彫刻の施された手摺りつきの回り階段などがそのまま残されていた。帰りがけに、すぐ後の建物の「児童発達研究所」に立ち寄ったが、夏休みでどの教授も不在で、セクレタリーに案内され、私の頃の教授の写真が壁にかけられている記念資料室でひとときを過ごした。

四十五年を経て、たくさんの知人が亡くなり、世代が代わり、アメリカの社会は大きく変化した。中でも、障害をもつ人々の生活は大きく変化しつつある。居住型施設は閉鎖され、作業所も閉鎖されつつあり、障害をもつ人が市民として社会そのものに包含されている。その実際は話に聞いていた以上であった。

その変化の原動力となったのは、「障害」よりも「人間」を先にするピープルファースト運動の考え方である。このことを考えるとき、教育も福祉も同じ地盤に立つという人間社会の原点に立ち返らされる。

下の写真
「パティーホール」旧ミネソタ大学児童研究所、現在、居住型施設とコミュニティ生活センターになっている。



子どもたちへのまなざし (22)

K男の変身

松井　とし

ある幼稚園の園内研究会で、他の幼児をこわがり、担任と離れられない四歳児K男のことが話題の中心となった。若い担任の先生は、ひとりっ子で、同年齢の子どもと遊んだ経験もなく入園してきたK男の不安な気持ちを受け入れ、かかわっていた。いろいろな場面でのエピソードが話された中で興味深かったのは、ふとしたことから始まった「お店やさんごっこ」の中で、K男がそれまでとは違う、自立した一面をみせたという話だった。

六月下旬のある日、それぞれ好きな遊びを楽しんでいる時に保育室の中にいたその先生は、廊下にいた子どもと目が合った。窓に近づき向かい合うと、お店のカウンターみたいに感じ、思わず「いらっしゃいませ」と声をかけた。子どもは驚いたようだったが、次の瞬間、表情がパッと輝き「アイスクリームください」と言った。「ソフトクリームと棒のアイスとどちらにしますか?」「ソフトにします」。近くにあった紙にソフトクリームの絵

を描いて渡すと、子どもはお金を出す動作をする。このやり取りを見て誰からともなくお店やさんの前に並び列ができ、気が付くとK男も自分から並んでいた。「いらっしゃいませ」「あの、いちごのついたゼリーをください」「はい、ちょっとおまち下さい」「はい」「おまちどおさま。百円です」K男、ポケットからお金を出す仕草をする。「ありがとうございました」「もうひとつ、チョコのアイスをください」「すみませんが、たくさんお客さんが待っていますので、一人ひとつになっています。もう一度並んで買って下さい」「ああ、そうですか」K男は再び列の後ろに並んだ。

この出来事をふりかえる先生の言葉。「散歩やクラス単位で移動する時は、列に入らず友だちに触れられるのも嫌がるK男。いつも教師の隣にいるK男が、自分から混雑した列に入って並んだことに驚き、嬉しく思った。K男の番がきた時は『K君。一人で並べてえらかったね』と声をかけようか大いに迷ったが、遊びの流れに影響すると思い、やめた。K男が『もうひとつください』と言った時も特別に売ろうかと思ったが、結局は断わった。納得してもう一度並んでK男が、まるで別人のようだった」

K男を包みこみ、緊張したふだんの生活から解き放した「お店やさんごっこ」の世界。その始まり方のセンスと、あくまでも店の人を演じ続けた若い先生の感性に乾杯！

（元幼稚園教諭）

四季の庭・四季の道

正月の花

浅山　英一

一年中でいちばん心が改まるのは正月です。床の間に〆飾り、三宝の台にはウラジロやユズリハが葉を広げ、鏡餅が重ねられている情景は、どこの家庭にも、会社などの事務所などにも見られます。これは日本にしか見られない新年特有のデコレーションです。

玄関先にはタケとマツ。庭にはハボタンの寄せ植。テラスには小さなマツとフクジュソウを植えて白砂を敷きつめた平鉢などが置かれているのを見ると昔からのしきたりに厳粛な思いが湧いてきます。

冬は花が無いからなどと言わないで、庭の片隅に茂っているハランの株をさぐり掘って見ると土に埋もれて八枚弁のチューリップのような花が咲いています。

庭の植え込みには雌雄異株のアオキの紅い実が

輝き、ヒヨドリの好餌ピラカンサやマンリョウ、センリョウの実もたわわについています。

正月は花も実もないから子ども達にはつまらないとは言わせません。

それに加えること、花店には色とりどりの草花がいっぱいです。スイートピー、パンジー、プリムラ、シャコバサボテンなど香りと色にとまどいするばかりです。

子どもたちに花と植物に親しみを持たせる絶好のシーズンとも言えるわけですから、前以て自らよく調べ、持参したものを前にいろいろの説明ができるようにしておきたいことです。

苗の植えかた、育てかたなど栽培の面や葉や花の色、形など植物学的なことにも軽くふれることのできるチャンスです。

ふつう三月に咲くフクジュソウやプリムラなどがどうして真冬に咲くのかと質問が溢れることでしょうが、温度と日照時間の然らしむることなど冬なればこそ話になる機会ですから、作業はさておいても花と植物の話をはずませてよい筈です。

春の七草

折しも正月は七草の節句です。「セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロこれや七草」とうたわれた七草の行事の縁起は古くてわかりませんが、正月七日に七草粥として食べる習慣は緑黄色野菜のない時代に山野に僅かに萌え出る雑草のうちから七種を選んで欠乏したビタミンを摂ること

が考えられたあらわれと思われます。

小倉百人一首に、

君がため　春の野にいでて　若葉つむ
わが衣手に　雪はふりつつ　　光孝天皇

とありますが摘んだ若葉は七草であったと思われます。

江戸時代には五節句の一つとして公式に定められた七草には、栗、串柿、ニンジン、ゴボウ、大根、タラの芽なども用いられ、正月六日の夜や七日の早朝にマナ板の上で包丁、スリコギ、火箸など叩きながらはやした唄は今も伝えられていますが、同名異人ならぬ異植物です。

七草のプロフィル

セリ

日本中どこの田や小川のほとりにも生えているセリ科の多年草で、秋に根際から出る走茎の先端から出る新苗を食用としますが、春先に出るものが軟らかく香りもよいので、浸しもの、和えものによろこばれます。ミツバによく似ていますが多分に水を要するので栽培するときには水をたたえた水田を利用し、次第に水位をあげて三〇センチほどに軟白するようにしています。

茎葉一〇〇グラムは二十二カロリー、ビタミン含量はB_1が〇・〇四ミリグラム、Cは五―五〇ミリグラムありますが茹でてしまうとかなり失われてしまいます。

セリによく似た大型のドクゼリには猛毒があるので誤って採らないようにすることが大切です。

ナズナ

ペンペングサともいうアブラナ科の一年草ですが、三味線のバチに似た果実を耳に近よせてこすり合せると軽い音がするので子どもたちが採って遊びます。

早春の若葉を摘んで浸しもの、和えもの、油いためとして食べることができ、御飯に混ぜてたくと香りがしますがとくにおいしいものではありません。

ゴギョウ（御行＝オギョウが正しい）

ハハコグサともホウコグサともいう路傍に生えるキク科の雑草で、茎葉に白い軟毛を密生していてさわるとフワフワして手ざわりがよいもので、粥（カユ）に入れたり茹でて食べたり、餅に入れて母子餅と称して焼いて食べたりされてきました。富士山麓などに多いヤマハハコも同類の植物ですがドライフラワーとしての利用も多く、ハハコグサと同様に食用とすることができます。

ハコベ（ハコベラ）

庭に植えると厄介なナデシコ科の雑草で地方によってアサシラゲ、ヒヨコグサ、スズメグサとも呼ばれています。

若い葉を摘んで茹でこぼし、浸しもの、油いため、汁の実、和えものとして食用としますが、老成したものは繊維が強く噛み切れません。昔から利尿薬、催乳薬とされてきましたが効き目の成分は不明です。時折ハコベに似て大型で繁茂するウシハコベも雑草化しています。カナリヤなどの小鳥は食べませんがハコベと同様に食用とすることはできます。

ホトケノザ

春の七草でホトケノザという植物はシソ科のホトケノザではなく、キク科の雑草タビラコのことです。

タビラコは田平子とも書くように、路傍に冬から春までの間にタンポポを小さくしたような葉をロセット状に開き、春には一〇センチほどの花茎を立て分枝し径一センチほどの淡黄色のタンポポに似た花を数個つけます。若葉を食用にすることはできます。

シソ科のホトケノザは四～五月に花茎を数本立てて円坐のような対生葉に紅紫色の唇形花を輪生します。

スズナ

スズナはカブラのこと。七草に数えたカブは現在の改良種のカブのことではなく原種に近いアブラナ科の植物であったにちがいありません。

スズシロ

スズシロは今のダイコンの古名です。これも改良されたものではなく古い時代にヨーロッパから中国に伝えられたハツカダイコンの一種であろうと思われます。

百花園の七草籠

東京墨田区向島の百花園では、毎年正月に七草の会を開き、七草粥を賞味し、土産に七草を植えた籠を提供しています。

七にこだわる習慣

昔から日本でも外国でも七という数を良しとして他の数字より高く評価していたようです。しか

し必ずしも吉ばかりとは限りませんが、ギリシアの七賢人、中国の竹林の七賢、七言詩、七声、七人の侍、七つの海、七福神、ラッキーセブン、七宝（シッポウ）、七味唐辛子、お七夜、七雄（中国の戦国時代の国）、七曜暦（日月火水木金土）、七輪、七五三の祝、七草もその一つで、どうして五種類、三種類、一〇種類としなかったかと思われます。

七・五・三の合計は十五となりますが、下の図のように縦、横、斜に方陣に並んだ数の和が何れも十五になることを子どもたちにも覚えさせておきたいことです。覚え方は上から横に読み「にくしの山は七五三、六月一日は十五夜の月」と読めば子どもたちにもすぐ覚えられます。

唄い伝えたい七草のうた

摘んできた七草をマナ板の上で切りきざむとき、お婆さんが孫たちにきかせたうたは「七草ナズナ、唐土の鳥も日本の鳥も渡らぬ先に……」というのですが、節おもしろくトントン叩きながらうたえばよいのです。

そのような習慣は今は少なくなってしまってその歌さえも聞いたことがないという時代ですが、子どもたちは幼な心に覚えたうたを老人になっても思い出すことでしょう。

2	9	4
7	5	3
6	1	8

たて・よこ・ななめ
を合わせて15になる

近頃は大正、昭和のはじめ頃に歌われた童謡も唱歌も子どもたちには伝えられていませんが、野口雨情、西条八十、北原白秋などがすばらしい歌を残しています。歌ってきかせるだけで子どもたちにはふるさとの良さやひびきが伝えられてゆくのです。長年のうちに歌詞は忘れてもメロディーは頭に残ります。

私など、「……ペチカ燃えろよ、お話しましょ」とか、「歌を忘れたカナリヤは、……月夜の海に浮べれば忘れた歌を思い出す」などいろいろの歌を思い出して口ずさみます。私は八十路の峠が降り坂になっても童心に返ることが出来ることを幸せだと思っています。

一木一草と親しむこころ

春はウメ、スイセン、サクラ、ネコヤナギを、夏は路傍のツユクサやキクイモを、秋はハギ、オシロイバナなどと身の周りにある植物を美しいと思い、掌にのせて水で揉めば石鹸のように泡立つシャボンソウ、など日本古来の植物も、外国から渡来した多種多様の植物も幼な心にそれがよき友だちとして残るのです。思い出に残るばかりでなくそれを利用して生活をたのしくする工夫も必ず生れてくることを信じたいものです。

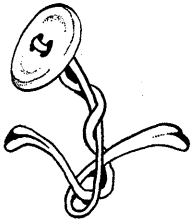
（園芸研究家）

東欧の子どもたちと幼児教育(4)

家族を描く

―ブルガリアの子どもたちの絵―

杉本　裕子



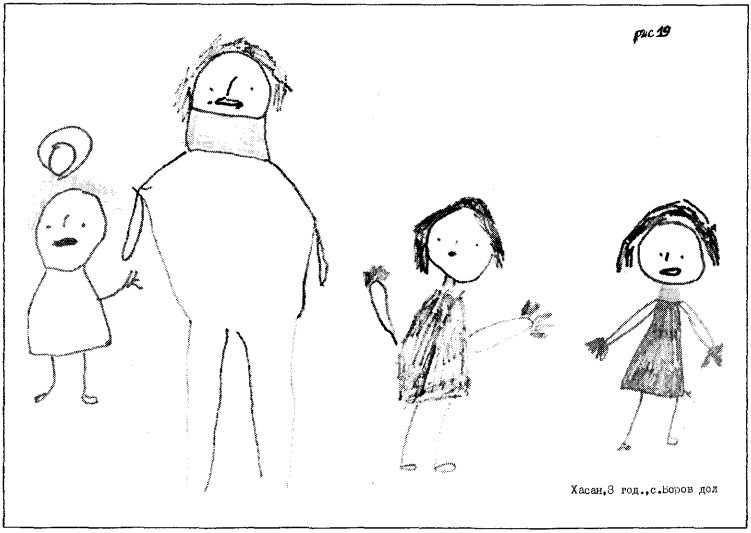
本誌の五月号でご紹介しました、ブルガリアのディミトロフ教授（ソフィア大学）の論文から、今回は家族を描いた子どもたちの絵に言及しているところの一部分をご紹介します。この研究は、現代ブルガリアの家庭における子どもと親との間のコミュニケーションの輪郭を、子ども（三歳から十二歳）の描画に見られる表現から描きだそうと試みたものです。

＊

子どもたちは絵の中で、細部の描き込みを通して満足感や幸福感を伝えてきます。ご馳走で一杯のテーブル、明るい色で描き込まれた木々や草花、また空を飛ぶ鳥などです。しかしそれだけではなく、子どもたちは様々な表現をしているようです。

家父長制の流れで、父親が家族の中で強い権力を持っている場合、父親は他の人物より二倍も大きく描かれています（図1）。この絵を描いた子どもは、家庭における父親の際限のない権力に対して、彼女なりに、父親の手指や足を描かないという仕方で気持ちを示しているように思います。

家庭の中で主導権を握るのが母親の場合もあります。子どもにとって、味方である父親が手前に丁寧に描かれ、一方母親の上には斜めの線が引かれていたり、顔が塗りつぶされていたりします



◀図1

図 2

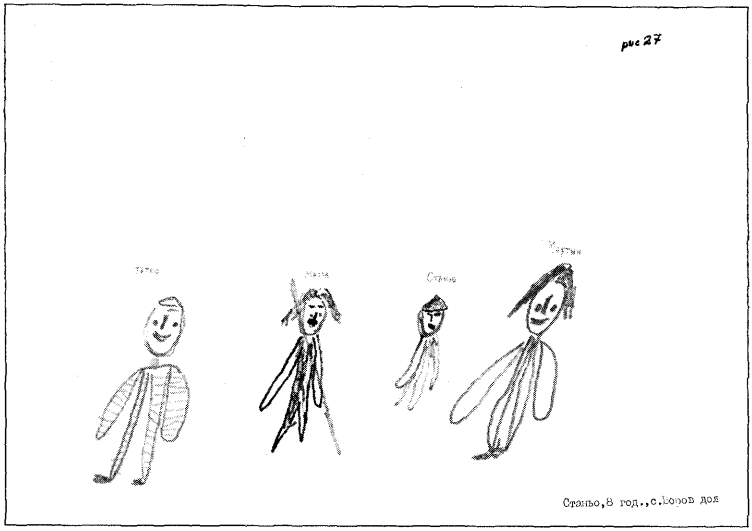


рис 27
Станьо,8 год.,с.Лопов доя

図 3

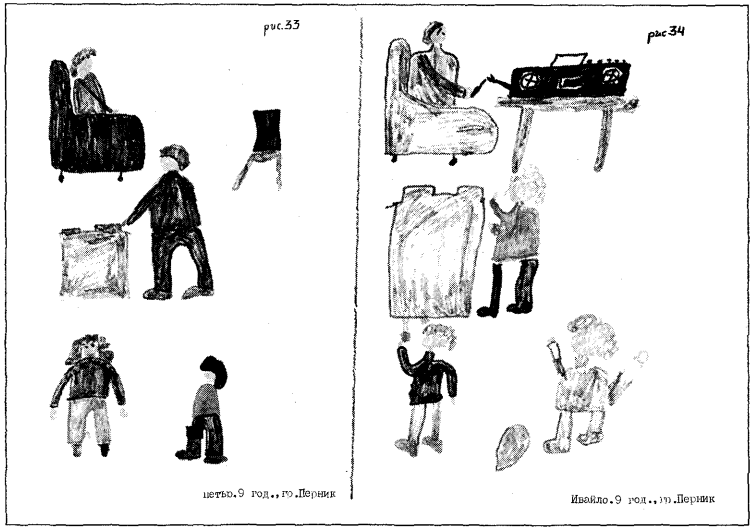
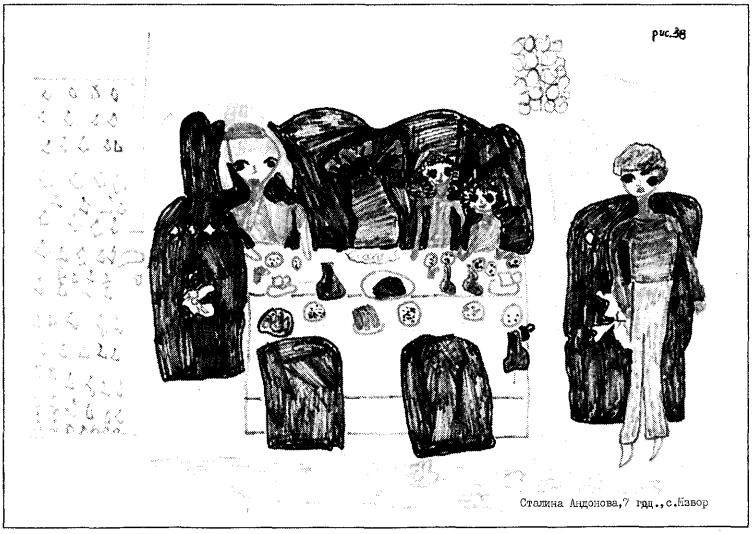


рис.33
рис 34
петьо.9 год.,го.Перник
Ивайло.9 год.,го.Перник

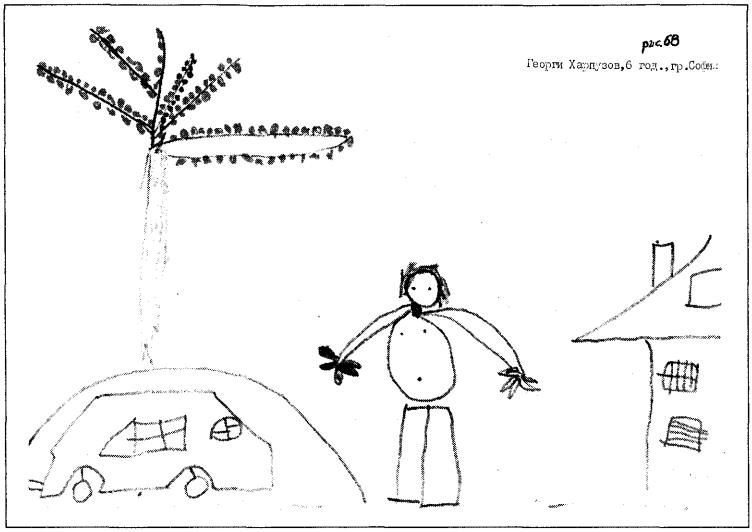
（図2）。あるいは父親と子どもは仲良く手をつないで寄り添いながら、母親は絵の中で一番離れて立っていて、しかも口が描かれていないというものもあります。

両親が自分たちの仕事のために家でも忙しくしていて、子どもを顧みないという場合、子どもたちと両親が隔たって描かれています（図3）。そして子ども同士は仲良く親密な様子で手前に描かれていますが、大人たちの顔には目も口も描かれず、背景に退いています。これはお互いにコミュニケーションをしているのは子ども同士だけ、ということでしょうか。

小学生になると絵の中に家具や家の中のこまごました物を描き込むようになります（図4）。しかしそれらが絵の大部分を締めていたり、人物の配置の上で重要な役を果たしているような場合、それはむしろ家族の間での親密な関係に欠けてい



◀図4

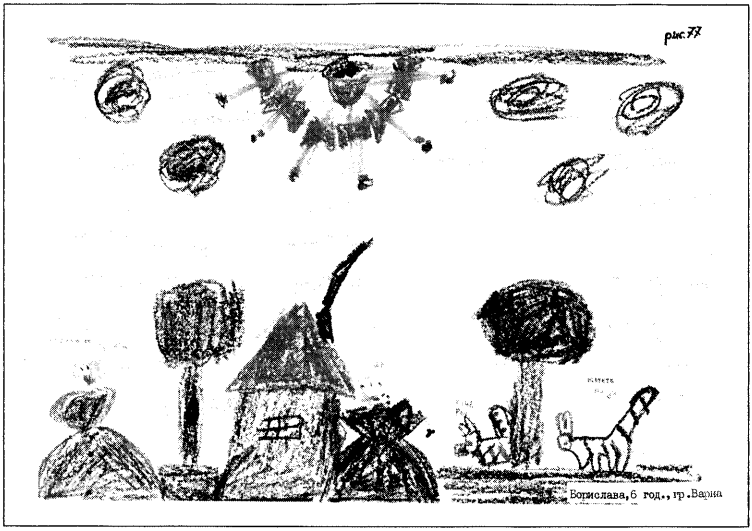


◀図5

ることを表しているかもしれません。

自分の兄弟、姉妹を意図的に描かないことがあります。両親の愛情を独占したいという気持ちの現れでしょう。その一方で、家族の絵であるにも関わらず自分一人しか描かないということもあります。自己中心性の現れでしょうか。そこに描かれた自分は、画面の中央で自分の好きな色をまとい、たくさんのアクセサリーをつけ、すてきな洋服を着ておしゃれをしています。しかし、子どもが自分は両親と一緒に何かをしたり、おしゃべりを楽しんだりといった経験があまりないと思っているような場合には、子どもは自分を小さく、また単色で描き、顔や洋服などに細部を描き込みません（図5）。家族の中での自分の存在価値に不安を感じている様子がうかがえます。

家族の絵に家族以外の人物や動物を描き加えることもあります。自分と同年齢の子どもや、想像



▼図6

上の兄弟などです。この時描き手の子どもは、自分も家族の一員として対等な人間関係の中にいたいのだということをアピールしているようでもあります。小学校の低学年の子どもは、愛情をかけてやれる対象であるペットを描き込むことがあります。本当は自分にこそ愛情をかけてやって欲しいと望んでいるに違いないのですが（図6）。

（私訳による要約）

（保育研究グループはるにれ）

外国の文献から

『心情と知性の教育
―日本の就学前と小学校教育に関する考察』

第六章　生徒が誤った行動をしたとき
仲間や教師はそれをどのように扱うか

桝田　智子

日本の学校教育は、子どもたちの学校に対する積極的なかかわりを育てることに主眼を置いている。このかかわりが育つにつれて、子どもたちは学校の価値を認識し、日本の学校で重要視されている「優しさ・協力・責任感」という目標に合うような行動をするようになる。それでは、生徒がこれに合わない誤った行動をしたとき、どのようなことが起こるだろうか。

日本の就学前教育や、小学校低学年の教育には次の四つの特徴があるように思われる。

①ある子どもが誤った行動をしたとき、その行動に積極的にかかわるのは仲間たちで、大人は黙って見守っていることが多い。

②教師は、子どもの行動の動機を良い動機と見なし、「悪い子ども」というアイデンティティを発達させないようにする。

③教師は教育的介入をするとき、子どもたちがそれに対してどのように反応すれば良いかを覚えることではなく、その意図を理解することに焦点を置いて、方略を考える。

④教師は、子どもの誤った行動を学校生活へのかかわりが不足しているためと見なし、子どもが仲間や教師との絆を強めることができるように努める。

以下に、具体例をはさみながら、筆者の目に映った、日本の教育における子どもの誤った行動の扱いの特色を説明する。

誤った行動の扱い

「ある幼稚園でのこと、五歳の男の子たち数人が、『爆弾だぞ』と叫びながら、金魚の水槽に小さな粘土の玉を落としていた。担任教師は何度か『金魚が病気になっちゃうわ』と穏やかな口調で説明したが、彼らはやめなかった。教師は帰りの時間にクラス全員に向かってこの出来事について話し、『彼らはえさに似た粘土を落とすことが金魚のためになると思ってやったのだけれども、これを食べたら金魚は病気になってしまうかもしれ

ません』と言って、皆にこの問題をどうしたらよいかを尋ねた。子どもたちはしばらく自主的に話し合った。話し合いが済んだ頃、教師はその話し合いの内容をまとめ、そういう行為を見たらお互いに注意しあうこと、金魚にえさをやるのを当番にすることを確認した」

教師たちは殴り合いから仲間はずれまで、様々な問題を子どもたち同士が解決すべきこととして扱っていた。

幼稚園や小学校低学年の教師はしばしば、子どもたちにお互いの行動を見張るように仕向けていた。そして子どもたちが仲間の誤った行動に対処するのに手間取っているとき、教師は十分でも二十分でも辛抱強く待っていた。このようなとき、教師は怒っていたとしてもそれを子どもたちに見せようとはしなかった。彼らは子どもたちに「私たちは皆、一緒にここにいる」という態度を伝えていたようである。

ある教師は筆者に、「私は、教師がそこにいるからといって柔軟になるような子どもになってほしくはありません。自分たちで何をすべきかを考え、自分たちで物事を判断することを学んでほしいのです」と説明した。

また教師は、殴り合いのけんかでさえ子どもたちに対応させることもあった。

「二人の五歳の男の子が、教師が見ている所でけんかを始めた。教師は小さい方を『頑張れ』と励ましさえしていた。しばらく教師はそばに立っていたが、他の子どもに二人を仲裁するよう頼んでその場を離れた。最初に仲裁した二人は失敗したが、後の二人の女の子の仲裁は成功し、けんかは収まった。教師はクラス全員にけんかの詳細を話し、四人の仲裁者の名前と、その失敗と成功を説明して、四人を誉めた」

多くの幼稚園の教師は、ほとんどのけんかは見守りながら続けさせると話した。また数人の教師は、けんかに価値を置いているとも話した。彼らの話から考えると、教師たちは子ども自身のけんかを解決する力を育てようとしているようだ。けんかは個人的な問題ではなく、クラスの問題であり、クラスとして問題に対処する機会である。けんかに対する教師の寛大さは、彼らがそれを良いことと認めていることを意味するものではない。子どもたちは、実際のけんかからそれに対処することを学ことができるし、またそれを学ぶべきであるという信念からこの寛大さが生まれていると考えられる。

また教師は仲間はずれへの対処についても次のように話している。「子どもたちがひとりぼっちの子どもに関心を寄せることは大切なことです。子どもたちに、それがひとりぼっちの子どもだけの問題ではなく、全員の問題であるということを理解させるのも大切なことです。子どもたちがイニシアティブを取って、孤独な仲間や新しい仲間を溶け込ませることができるように助けるのが教師の役目です」

他の研究でも示されているように、子どもたちは他の子どもについての判断を任されたとき、大人より極端な罰を与えたり、残酷な行為をすることがある。しかし日本では、教育の中で友情・親切・共同体の価値などを強調することによって、子ども同士による残酷な社会化は回避されているようである。

「良い子ども」というアイデンティティを守る

子どもはすべて、本質的には良い子どもであるという考え方は、歴史的に見ても、現代においても、日本の保育を支配している信念である。

「男の子たちが粘土の玉を水槽に落としているのを見た担任教師は、それを、えさに似ている粘土の玉を落とすことが魚のためになると考えた行動であると見なし、子どもたちに意地の悪い動機を返さないようにしていた。彼らは悪い事をしたのではなく、それが悪い事を理解していなかったと教師は考えた」

「ある幼稚園で五歳の男の子が大きな石を投げようとして腕を振り上げた。教師はそれを見て『その石を貸してちょうだい』と言い、その子どもの頭に石で触って、もしそれが友だちの頭に当たったらどうなるかを示してから、『気をつけて運んでね』と、その石を子どもに返した。教師は、その石を置くようにとも言わず、どうしてそれを投げようとするのかと問い詰めもしなかった」

この教師の行為は、子どもが、その石が他の人を傷つける可能性についてよく考えなかったことを問題にしている。また、その子どものセルフコントロールの能力を信頼した行為と言える。もしこのとき子どもが罰せられたり、石を下に置くように言われていたら、この子どもは自分が信頼できない、あるいはセルフコントロールのできない子どもだという感じを強めたかもしれない。しかし、この教師の対応を通して、この子どもの良い・信頼できる子どもだというアイデンティティは守られたと言える。

五歳児の「良い子ども」というアイデンティティはまだ生まれたばかりであり、壊れやすい。彼らは自分の道徳的価値の判断基準として、大人の反応を利用している。

教育の目標は反応の仕方を覚える事ではなくその意図を理解する事である

教師たちはしばしば、生徒たちはまだルールを理解していないのだと言う。ルールを「理解する」ことは単にそれを繰り返したり、説明できることではない。これらのルールが、集団生活においてなぜ欠かすことができないのかを理解して、初めて適切な行動は生まれるのである。これが強制や威圧によらずに、自然に理解するということである。

幼稚園児や小学校低学年児の道徳方針は、自分自身の望みによって規定されるのが普通である。日本の教師は、この年代の子どもたちはまだルールの理解について発達途上であると考えており、それを逸脱したとしても、罰せられる理由としては扱わず、理解を深める機会として扱っている。

誤った行動を通して絆を強める

多くの教師が、教育には、子どもと教師や他の子どもとの絆を強めることと、勉強に適した環境を維持することの微妙なバランスが必要であると考えている。授業中に騒いだり、混乱を起こしたりする子どもを叱るときでさえ、教師は子どもの「良い子ども」というアイデンティティを守ように、そして友だちに対しての面目を保たせるように努力することで、絆を守ろうとしているようである。

また誤った行動が起こった時、日本の教育は機械的にそれを扱うのではなく、感情的に対応しがちである。子どもの感情や、教師や他の子どもとの絆に訴え、その絆を強めるように努める。教師

による直接的な要求や否定は、子どもの望みと教師の望みとのギャップを強調する。しかし感情に訴えることで、子どもたち自身の気づきを促し、その過程でギャップを調整し、絆を守ろうとしているようである。

仲間による教育と大人による教育との比較

日本の子どもたちは、教室内の生活の多くの面を管理しているのは、教師ではなく級友であると考える傾向にある。仲間による管理は、どのような結果を引き起こすだろうか。

第一に、子どもたちに管理の責任を当然のものとして持たせる事により、教師は温かく優しい態度を保つことができる。第二に、子どもたちは自分の行動の当然の結果として、仲間からの罰を経験するかもしれないが、このような自然な結果は欠点についての明白で即時的なフィードバックを与える。第三に、小さな子どもたちは道徳と大人の権威を非常に結びつけているため、彼らについての大人の見方は、子どもたちのセルフイメージに影響を与えやすいが、仲間による非難は子どものアイデンティティをそれほど脅かす事はない。

しかしその反面、仲間による管理には欠点もある事を筆者は指摘する。たとえば殴り合いさえも仲間同士で管理させる事は不安を感じる。筆者の考えは、「教師は、けんかを問題解決の手段と理由づけて、容認しているのではないだろうか」「教師が、子どもが叩かれているのを助けなかったとしたら、それは教師が子どもたちに同情する心を見せる大切な機会を逃していることにはならないだろうか」「日本の教師は、子どもたちの問題解決能力を育てるためと、けんか両成敗という言葉にとらわれているための両方の理由で、けんかの仲裁を躊躇しているのではないだろうか」と

いうことである。

また、教室の管理という名目で起こる攻撃についても、大目に見ている教師もいるようである。そのような教師はまるで、集団の発展に関心を置くあまり、個人に対する攻撃を容認しているようである。このような仲間による過度の社会化が、一人に対する集団のいじめの基礎を作る可能性について考えることの重要性を筆者は指摘する。

適合への圧力

日本の教室内には、細かい行動に関する唯一の正しい方法を子どもたちに押しつけていることが多く見られる（例　机の上の整理の仕方、靴のしまい方、板書されたことのノートへの書き写し方など）。子どもたちの行動を管理する規則や指令は、個別に見れば、特に小学校低学年までの子どもにとっては、それほど害のないものといえるかもしれない。しかし微妙な、あるいはかなり大胆な方法で、子どもたちが個人で進んで考え、行動することを害しているかもしれない。この方法は扱いやすい子どもを作り、クラス運営の能率を上げるかもしれないが、思慮深く、独立した行動を育てることはできない。

しかし日本の教室でしばしば見られた、内容が独断的で、重要でない規則に関して、それへの従い方には、子どもの意図と自主性が尊重されていた。子どもたちは、どうしてそのような規則があるのかを充分に話し合い、自分たちでお互いを助け、注意し合う責任を負った。日本の教育において、子どもたちが規則の内容に服従することにより規則を理解するように支えられているその過程

が興味深い。

日本の教師の多様性

日本の教師は、教育に対する期待において様々である。子どもたちに期待しているセルフコントロールの度合いも、教師や学校によってかなりまちまちであった。ある教師は、子どもたちの行動を形成するために、毎朝たくさんの指示をしていたが、逆に子どもの行動を変えさせるための直接的な要求を全くしない教師もいた。手いたずらをする子どもの手を、はえたたきで叩く教師もいれば、ほとんどの子どもたちが学習に従事している限り、いくらかのうるさくて邪魔な行動を大目に見ている教師もいた。しかしほとんどの教師の理想は、生徒と教師の間の信頼の絆に基づいた、優しく目に見えない誘導であった。

日本の新任教師の研修は、教師と生徒との間の暖かく、密着した関係を作るための技術に重点が置かれている。このことから、戦後の「民主的」教育哲学は、生徒と教師の間の関係に関する、伝統的な日本の理想に受け継がれていることがわかる。

また日本の育児が、歴史的に見ても現代においても、子どもの本質的な良さへの信頼を重視し、服従よりも、むしろ調和を強調していることは、三五〇年の間に複数の西洋人によって書かれた、日本の育児についての説明が類似していることからも明らかである。

（お茶の水女子大学大学院）

編集後記

明けましておめでとうございます。今年の表紙絵は小田原千佳子さんに描いていただきました。ひとりでいる時の子どもの姿は、どこか哲学者風に見えます。一年間、どうぞよろしくお願いいたします。

＊

昨秋の遠足の日の夕食時、小学二年の娘の口からいっしょにお弁当を食べたR君の話が出た。R君のお弁当はウィンナーと玉子焼きだけだった。娘のお弁当を見て「にぎやかでいいですなあ」と言い、自分のお弁当を「名付けてサビシイ弁当」と笑って見せて「でもお父さんの作ったお弁当なんて、めったに食べられるもんじゃないから」と楽しくみんなで食べたという。娘にとっては、どうして笑えるのかが自分の理解を越えて引っかかっていたようだ。R君とは保育園の時から一緒で、どちらかというと気が弱い印象を私は持っていた。だからその話を聞いて驚くと共に彼に対して申し訳なく思った。R君の中ではいろいろな思いがよぎっていただろう。でもそれを笑いに変えてしまうなんて、彼は何と強いのだろう。「R君カッコイイね」「強いね」としきりに言う私に半ばあきれながらも、娘は自分がもしR君だったらと問われて、何となくその意味が分かったようだった。

大人が思う以上に、子どもは大人の事を分かっている。してあげられないことがあるのも、子どもの育つ力になると思うと心強い。（田）

幼児の教育

第九十六巻　第一号
（一九九七年一月号）
定価四五〇円（本体四三七円）

発行　平成九年一月一日
編集兼発行人　田代和美
発行所　日本幼稚園協会
〒112東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
〒108東京都港区三田五―一二―一
発売所　株式会社　フレーベル館
〒113東京都文京区本駒込
六―一四―九
☎〇三―五三九五―六六一三（営業）
☎〇三―五三九五―六六〇四（編集）
振替　〇〇一九〇―二―一九六四〇

☆本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

子どもの心とまなざしで

倉橋惣三絵本エッセイ

倉橋惣三がキンダーブックに寄せた解説をまとめた一冊。子どもをあたたかなまなざしで見つめた彼の姿がよくわかると共に、私たちに子どもの心理とものの見方をていねいに教えてくれる。リズミカルで詩のようなやさしい語り口が心地よく、プレゼントにも最適である。

解説／本田和子

倉橋惣三　著

B６変型判・定価1,200円（本体1,165円）

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

創業90年・キンダーブック創刊70年記念出版

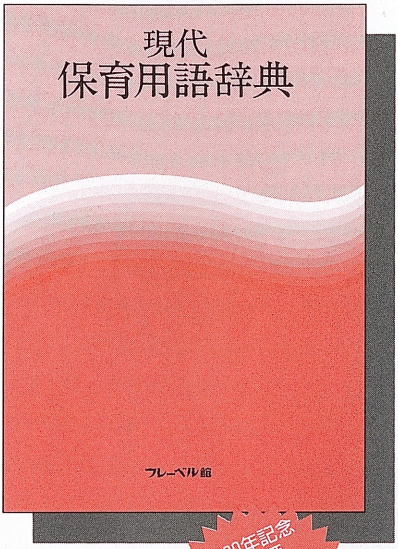
弊社は明治40年、幼児教育・保育への寄与を目指して東京・飯田橋の地に誕生しました。以来、皆様のご支援をいただきながら今年創業90年を、また、昭和2年誕生の「キンダーブック」は創刊70年を迎えることとなりました。
この創業90年・創刊70年を記念し、21世紀を視野に入れた情報源・知識源『現代保育用語辞典』を企画いたしました。新しい時代に対応する常備書として、皆様のお手もとにご用意いただければ幸いです。

保育用語約2,000語・人物約190名を50音順に配列し、解説。

現代 保育用語辞典

付録：外国の保育教育40ヵ国

保育を語る時に欠かすことのできない基本的な用語、新しい保育観・子ども観から出てくる言葉などを通して、保育の真髄とこれからのあるべき姿を分かりやすく示す辞典。みだし語は英訳付きで、今の保育に直結する語釈をポイントとし、引きやすく、意味がすぐ確認できる辞典。



編集委員

岡田正章・千羽喜代子・網野武博
上田礼子・大戸美也子・大場幸夫
小林美実・中村悦子・萩原元昭

執筆者

保育及び隣接分野の最高権威者330名が参画。

A5判・592頁・定価8,000円（本体7,767円）

創業90年記念特別定価
7,500円（税込）
平成9年1月31日までにお申し込みの方

キンダーブックの
フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。